ポスター12　　ポスター発表（実践）

出会い・気づき・学び、そしてそれぞれの変容
—高校進学ガイダンス開催がもたらした二次的意義—

原田かおり（山梨県立大学）・小林信子（ユニタス日本語学校）・萩原孝恵（山梨県立大学）

実践の場の特徴

山梨県では、2015 年より多言語による高校進学ガイダンス（以下ガイダンス）を開催し、2017 年からはロールモデルの話を聞くという企画を行っている。しかし、ガイダンスに協力してくれる高校生、専門学校生、大学生、社会人（以下高校生ら）を探すことは困難であり、事前に約束したにもかかわらず連絡が取れなくなったり、直前にキャンセルになったりする状況にある。

実践の目標

多言語でガイダンスを開催すること、そして出会いの場を作ることを目標とした。ロールモデルの話を聞き、参加者が自分の将来像を具体的に描けることを目指した。

実践の内容とその過程

これまで進路情報を多言語で知ってもらうこと、出会いの場を作ることを目標にガイダンスを開催してきたが、こうした活動を通して、参加者だけではなく、高校生らにも変化がみられることに気づいた。それは、アンケート、インタビュー、リフレクションを通して聞かれた彼らの声によって示された。例えば、「困っているっていう人たちに対して自分が少しでも手助けになれた」「心の中で親に感謝することができました」などである。アンケート、インタビュー、リフレクションの内容を使用することについてはそれぞれ本人から承諾を得ている。

結果と考察

本発表の目的は、ガイダンス開催がもたらした二次的意義について示すことである。協力してくれた高校生らの語りから自己肯定感が聞かれた。ガイダンスを通して社会とつながり、周囲の大人とのやり取りの中で社会性を学び、変容していく姿が見られた。気がつかないうちにガイダンスがひとつのコミュニティの場になりうることがわかった。

我々が目指したガイダンス開催の意義は、進路情報を多言語で提供すること、出会いの場を作ること、参加者が自分の将来像を具体的に描けることであったが、実際には参加者だけでなく、高校生らも自分の将来像を描くきっかけとなっていた。そこで本発表は、ガイダンス開催への協力が変化を促す刺激となっていることを提言する。

＊付記　斉藤祐美（山梨外国人人権ネットワーク・オアシス）